



協力隊の現状と展望「一時帰国から新たな挑戦へ」

JICA 青年海外協力隊事務局 事務局長 小林広幸

白山肇会長をはじめとした青年海外協力隊マレーシア会の皆様、この度は、貴会会報で JICA 海外協力隊の様子をお伝えする貴重な機会をいただきまして、誠にありがとうございます。また、この稿をお借りしまして、日頃からの JICA ボランティア事業と海外協力隊への皆様のご支援とご協力にこそからお礼を申し上げます。

前回、皆様にお会いする機会を得ましたのは、2019 年 9 月に市ヶ谷で行われた総会のときであったと記憶しております。熱気に溢れ、和気あいあいとした空気に満たされた会場から、マレーシア会の皆様の熱意と結束を肌で感じました。その直前にも、私はアジア VC (Volunteer Coordinator) 会議出席のためにマレーシアに出張しており、当時、マレーシア日本国際工科院で活動されていた 2 名の隊員とお会いする機会を得ました。アフリカでの経験が比較的多い私にとって目の覚めるような大都会クアラルンプールで、やはり相互理解と信頼を大切に、両国の懸け橋として活動されている姿に感銘を受けました。あの 9 月以降、直接多くの方々とお会いする機会や海外への出張の機会があまり無かったためか、これらのマレーシアに関わる一連の機会と出会いはとても懐かしく、つい最近のこのように思い出されます。



総会での小林事務局長

その後、皆様もご存知の通り、同年の年末頃より、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大が始まり、翌年 2020 年 3 月には当時派遣中の全隊員約 2000 名の一斉一時帰国を実施しました。また、同じ時期に派遣前訓練を終えて今まきに出発しようとしていた隊員の方々の派遣を延期し、更に、その後に予定されていた訓練の実施も延期せざるを得ない状況となりました。昨年度は春募集の選考と秋募集も中止となり、海外に 1 名の隊員もいない期間が長く続くという、本事業始まって以来の未曾有の事態となりました。

一時帰国を実施した当時、世界の国々では、数日の内に国境封鎖や国際便の運航停止措置が図られ、隊員の帰国も一刻を争う中で進められました。多くの隊員は任地で同僚や友人との別れを惜しむ間もなく、必要最低限のものを詰め込んで出発されたと思います。マレーシア隊員は 3 月 23 日に帰国し、空港近くのホテルに一泊した後、JICA の国内機関で約 2 週間の健康観察を行っていただきました。慌ただしく帰国した隊員

達は、久しぶりの日本を楽しむ事も出来ず、不自由な生活を余儀なくされました。私は健康観察期間中に一度、説明会のためにその国内機関を訪問しました。そこには、外出が許されない施設の屋上で、黙々と体操をしながら制約で埋め尽くされた日々に向き合う隊員達がありました。どのような環境においても自身の安全と健康を維持するための術を身に付けた逞しい隊員達の姿でした。一人の感染者も出すことなく一時帰国とその後の健康観察を終えた奇跡は、隊員達の「自分の身は自分で守る」意識によって実現されたものです。

その後、約1年間に亘る国内での待機が始まります。待機期間中に派遣期間を終えられた方、特別登録に移行された方、新たな道へ歩み出された方、それぞれの思いが刻み込まれた1年間となりました。その間も隊員達は、オンラインによる任国支援を継続し、自己研鑽、国内課題の解決等に積極的に取り組み、その様子が各地の新聞等で毎日のように伝えられました。コロナ禍においても歩みを止めることなく、「今できる事」に全力で取り組む隊員の姿は、私も含めコロナ禍の日本に希望と元気を与えてくれました。マレーシアから帰国した隊員の一人は神奈川県にある中学校の国際教室で勤務しながら、派遣の機会を待っています。JICAのホームページの取材に答え、「マレーシアは多国籍国家で異なる文化や思想の人たちが、お互いを尊重しながら過ごしていることに感銘を受けました。私自身、会議の内容が分からないとき、困ったときに助けてもらったこともあります。このような経験があるからこそ、母語が日本語ではない子どもたちの目線に立ってサポートし、教授方法を考えられるようになったと感じています」と話していただきました。この1年間は、隊員としての経験が多文化共生社会を目指す今とこれからの日本で大いに必要とされていることを示した1年間でもありました。

一斉帰国から約8ヵ月が経った2020年11月のベトナム隊員を皮切りに、徐々に派遣/再派遣を進めています。4月末の時点で19ヵ国への赴任が実現しました。依然限られた数の国への派遣となっていますが、Withコロナに向き合い、ポスト・コロナを目指す新しい取組みを皆様と隊員達と共に開始しました。ベトナムに赴任した隊員は現地の楽曲に合わせて感染防止動画を製作しましたし、待機中に得たオンラインの知識を活かし、日本と繋がりながら現地で活動を再開した隊員もいます。苦しい待機の経験さえも機会に変えて、隊員達の挑戦は続きます。マレーシアについても派遣再開が決定しており、現在、現地の最新状況を確認しつつ、実際の派遣に向けた準備を進めているところです。更に、4月13日からは、やはり約1年間に亘り訓練の開始を待ち続けていただいた合格者の方々を対象とした派遣前訓練を再開し、5月20日からは2022年度の派遣を目指した春募集を開始します。皆様と一緒に一歩ずつ進んで参りたいと思います。

改めまして、マレーシア会の皆様の力強く、温かなご支援にこころから感謝致します。様々な機会に隊員達の声に耳を傾け、励ましていただきました。隊員達がこの1年、派遣を待ち続け、時には悔しさを噛みしめながらも新たな一歩を踏み出したのは、皆様のご支援があつてのことです。本当にありがとうございました。そして、これから始まる彼らの新しい挑戦につきましても引き続き見守っていただければ幸いです。

一日も早く落ち着いた日々が訪れ、再び皆様の素敵な笑顔にお会い出来ますのを楽しみに、私も隊員達に負けないよう「今できる事」に取り組んで参ります。引き続き皆様のご支援を賜りますようお願い申し上げます。皆様のご健勝とマレーシア会のご発展をこころからお祈りいたします。

今号は、新型コロナ感染の終息が見えない中で、事務局長に協力隊事業の現況について、OB・OGの方々に、それぞれの暮らしぶりについて、寄稿していただきました。

<あの時を遡って>

亀山 真奈美 (2019 年度 1 次隊 作業療法士)

2020 年 3 月。日本で covid-19 感染者が激増し「まなみ、マレーシアに居てよかったね」と呑気に話していた事も、もう 1 年以上前の事になってしまいました。あの時、他国隊員の一時帰国決定の情報が次々に入る中、いつも通り施設巡回に行っていた私は、どこか他人事のように思っていたのかもしれませんが。しかし政府からの正式な行動規制発表後、一気に状況が変わり、活動スケジュールも白紙に、隊員も Stay Home、そしてマレーシア事務所から連絡が来て一時帰国が決定し、3 月下旬マレーシア滞在 245 日目に帰国、と慌ただしく時間が過ぎ去っていきました。

4 月。帰国後も毎日目にする日本やマレーシアの状況。いつ再赴任できるのか全く見当がつかず、宙ぶらりんの状態が続いていた私は、配属先の同僚に相談し、療育活動を文章化し SNS でシェアする事にしました。そして、4 月下旬。JICA から連絡。やはり再赴任の目途は不明。8 月上旬まで様子を見るような形となりました。仕事もなく自分の存在意義が迷子になっていた私は、現状に嫌気がさしてきていました。8 月の状況次第で JICA からの手当がなくなる事にも不安を感じ、私は仕事を開始。自分の役割があるだけで、こんなに生活や気持ちにメリハリが出るのかと実感しました。

仕事にも慣れた夏頃、隊員に選択が迫られました。JICA からの保障を受けつつ再赴任にすぐ対応可能とする「待機」、一度契約を終え有期期間内に再赴任を検討する「登録」、契約を完全に終える「辞退」。「待機」となると「いつ再赴任になるのか」「今の仕事をいつまで続けられるのか（有難い事に理解のある職場でしたが）」等、また見通しの立たない状況に悩んでしまう事が予想できました。1 度その状況をリセットしたい。けれど協力隊としての繋がりには残しておきたい。そう考え「登録」を選択。しかし月日が経ち、段々と仕事が楽しくなり、もっとこんな事をしてみたい・学びたいという気持ちが膨らんできました。そして秋頃。とうとう私は、自分のやりたい事が実現できる職



場を探そうと、就職活動を開始。その頃から私の中で、「マレーシアへの再赴任」から「日本で働く」へと、気持ちが切り変わってきていたように感じます。そして冬。就職決定と同時に私は「辞退」を選択しました。もう協力隊としてマレーシアに再赴任する事はできなくなりました。正直名残惜しい気持ちもあります。2 年で終えられず帰ってきたのですから。

過去に例を見ない状況を経験し、先輩隊員たちが無事に任期満了できていた事は、当たり前な事ではなかったのだと強く実感しました。

もし 2 年無事に終えていたらどんな未来が待っていたのかは、私にも分かりません。ただ、このような状況だったからこそ出会えた人もいる。経験できた事もある。それらは私にとって大きな収穫です。そして、「辞退」後も変わらず連絡を取り合ってくれる配属先の同僚たち。今後世界の状況も自分の人生もどうなるか分かりませんが、いつか同僚を訪ね、隊員時代のように施設巡回に同行したいです。

この約 1 年もの間、自分が置かれた現状の中で何ができるのか、どうしたいのか・何度も考えました。過去を変える事はできないけれど、未来は選択肢にあふれています。そう思うと、どんな選択肢に出会えるのかなとワクワクしてきます。またマレーシアと重なり合える時もあるかもしれません。その時まで語学を忘れず、マレーシア料理を恋しく想い、日々の生活を楽しんでいきたいと思います。Terima kasih

新型コロナとヴェトナム

高梨基久（昭和 58 年 4 次隊 建築製図）

1983 年度最後の 4 次隊、ユネスコ立 IPOH 技術工業短大の建築科講師として派遣されました高梨基久と申します。現在、日系建築設計コンサルタントのヴェトナム駐在員事務所の所長として、2016 年 7 月に着任し、間もなく 5 年になります。ホーチミンシティ（元の Saigon（西貢））に単身赴任中で、都市デザインから建築では、超高層オフィス、政府本部ビル、放送センター、国際会議・展示場、医療複合施設、大規模コンドミニウム、ホテル、博物館、ハイテク産業施設、銀行、ランドスケープ、インテリアデザインと多種多様なプロジェクトを手掛け、現在も 27 件が稼働中で、首都ハノイ（河内）と経済の中心地ホーチミンを毎月行来しております。

ヴェトナム（越南）は、過去世界的に流行した SARS の収束に、大変苦労した国でした。その為、今回の新型コロナの世界的感染拡大にあたっては、早期より、まず隣国中国との水際対策をどの国よりも先駆けて厳しく実施しました。深夜に女性が独り歩きできるほど ASEAN 諸國中、最も安全な国で、南部はモンスーン気候に属しながらも、蚊に刺されることが殆ど無いほど、ペストコントロールが確立されており、また社会主義国家ということもあり、国民は政府指示を一様に、当たり前のように守る。都市部での仕事がなくとも、田舎に帰って家族と一緒に暮らす等、ヴェトナムにおけるコロナ感染抑制は、国民性による結果としか言い様がありません。各都市、地方省毎のコロナ抑制措置も徹底されており、感染者が 1 名であっても、日本人から見ると病的にも感じる徹底した隔離・ロックダウンを行った成果であると思います。一方最大の観光地ダナンではバブル化していたホテル産業とその建設が殆ど停止、多くのホテルが休業、廃業、売却、解体といった憂き目に合い、まるでゴーストタウンのようになってしまいました。国全体の日毎の感染者数は、4 月末までは、二桁前半までのごく少数に止まってはいましたが、隣国からの不法入国や帰国者・外国人入国者による強制隔離期間時の検査陰性証明発行後に発症、陽性確認のケースが複数件継続し、4 月末から 5 月初旬にかけての四連休後、それまで途絶えていた市内感染が再確認され、第 4 波の感染者も連日 200 名超えとなり、そのため、入国時の強制隔離期間が 4 週間に延長となりました。感染拡大の媒体と成り得る飲食・娯楽施設は休業、学校もすべてリモート授業といった徹底対策を続けています。日常業務では 5 月末までは、電車がない為タクシーやバス、バイクを使い、ほとんどの企業が通勤、オフィスでの業務を続けておりましたが、変異ウィルスによる感染確認から、現在は政府指示により、6 月末までの在宅勤務となりました。私の現地住居でもレストラン、ジム、プール、子供用施設の全てが使用中止、訪問者との面会は館外といった厳しい感染予防対策が取られています。

下手の横好きから、四十を過ぎて始めた音楽活動にけじめを付け切れず、此方でも日本人駐在員やフリーランスの面々、現地の若手演奏家によるバンドに所属して、末席を濁しておりますが、当面、年 4～5 回は開催していたライブ等もお預けの状態で、一日も早いコロナの世界的収束を願っております。



長旅、おつかれさまでした！

北村 豊（昭和 51 年 3 次隊歯科医師）

私の診療所の林の中を澄んだ水の小川が流れているため、鳥たちも飲水や水浴によく訪れてくれる。地下水のため、年中十数度の一定温度で、冬は鳥にも暖かく、夏には冷たくて訪問してくれるこれらの内温性動物にとっても快適な水なのだろうと勝手に思いながら、“鳥たちの水浴シーン”を診療室内の格子窓より、私はピーピングトムとなって時々のぞいているが、幸いにもおとがめはない…。

スズメは通年やって来るが、秋になってリンゴを栗の枝に刺したりするといろんな鳥がやってきて美味しそうにリンゴをついばんでいってくれる。より近く、その愛らしい姿を待合室の患者さんにも見てもらおうと二台の双眼鏡を置いてあるが、鳥を拡大して見た患者さんは、診療室で間近に見た自然の感動を話題にされることも度々あり、それを聞く度に私は幸せな気持ちにさせていただいている。

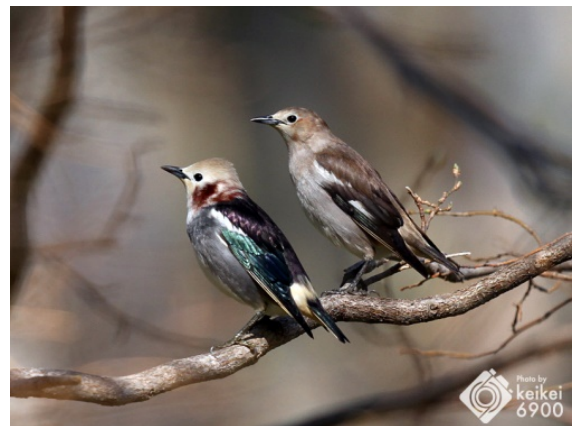
毎年実りの秋には鳥用のリンゴ集めを始めるが、近年では多くの方から、“鳥用のリンゴ”を沢山いただき、助けていただいている。

寒さが厳しくなるにつれ、当院の庭は訪問客の各種の小鳥で賑わい、とくに大雪の翌日は「注文の多い料理店」と化し、職員はリンゴの給餌に大忙しとなる。

時期により訪れる鳥も変化していくが、私が毎年、会えるのを特に楽しみにしている鳥がいる。それは、渡り鳥のコムクドリで、体長 19 cm 位の夏鳥である。集団でねぐらを樹につくって糞害や鳴き声で嫌われやすい留鳥のムクドリと同属ではあるが、コムクドリは、春爛漫の 4 月中旬頃に庭に訪問するようになり、6 月上旬に見られなくなる。それは、6 月以降も十分なリンゴを確保するのが困難であるからで、別れの時はやってくる。

私がこのコムクドリを待ち望むのには、主として二つの理由がある。一つは、このコムクドリは熱帯のマレーシア（ボルネオ島北部）やフィリピンから、小柄な体で渡ってくることである。マレーシアは私が青年時代の 3 年間をジャングルの国立病院で過ごした所であり、この国のボルネオ島のコタキナバルから小布施まで渡ってきたとしたら、なんと 4093km もの長距離を滑空性能の悪い翼で羽ばたいてきたことになる。

おそらくフィリピンの島々や台湾、そして南西諸島を経て、本州中部以北に分布していくのだろう。



パスポートを携帯せずにやってきたコムクドリの番い（出典：あいまいぶるぐーココログ 2014 年 5 月 23 日（金））



駐日マレーシア大使ご家族たちが 4 月 24 日にお忍びで私の診療所などを訪問されました。

もう一つの理由は、コムクドリは、鳥では少ない雌雄異色の羽毛を有する種であり、雄は艶やかな黒を中心とした翼をもつが、見る角度によって小羽枝の表面のケラチン層によって起こるとされる構造色で、緑色や青色がかった“シックな品のある美しさ”に魅了されている。

今年はコムクドリは見られなくなってしまったが、来春の再会が待ち遠しい。

（医療法人 信州口腔外科インプラントセンター所長）

コロナで世界が小さくなった！

吉田曜子（昭和 61 年 1 次 日本語教師）

～新しい SNS にチャレンジ～

2021 年 2 月から午前 4 時 15 分になると、クラブハウスの朝活の仲間に挨拶をして、5 キロの散歩に出かけるのが日課です。成田空港の近くの田舎町に引っ越してから都心に出かけることもほとんどなくなりました。

この 1 年半、飛行機に乗っていないどころか新幹線にも電車にも乗っていません。仕事の打ち合わせやセミナーはすべて ZOOM でことが足りるようになりました。

人と会って話す機会が減って寂しくなったという時に突如、クラブハウスという音声だけの新しい社交場が出現しました。クラブハウスにはビジネス関連、語学関連、趣味を語る会、音楽、演劇など 200 以上の部屋があります。

世界のあちこちにいる方から情報が入ってきます。コロナワクチン 2 回目接種の話、帰国時のホテル隔離の話など今必要な視覚障害者の方も参加されていて、私がこれまで知らなかったイベントやアプリなども教えてもらっています。

ツイッターにインスタ、アプリの作り方など、新しい SNS が増えて使い方がわからない人向けにやさしく教えてくれる部屋もあります。PC 操作が苦手な私は大助かりです。

自分の話をもっと聞いてほしいという人向けにスタンド FM という SNS もあります。自分で好きな内容のラジオ番組を作って配信できるので、クラブハウスより人気があるようです。



表紙

それでもまだまだ話足りないという人向けに Amazon で電子書籍を出版するという方法があります。これまでも紙媒体の本を出版する場合は最低でも 50 万円以上かかりましたが、これは初期費用もほとんどかからず簡単に出版できます。

というわけで、私はこれまで日本語学習者にも読めるレベルの本を 2 冊出版しました。

タイトルは「まったく英語がわからなかった私が海外で仕事ができるようになったワケ 1 & 2」です。マレーシアに初めて行った時からこれまでの記録を綴っています。

このように新しい SNS をビジネスに活用されている方も多いのですが、私自身は、20 代から 80 代までの幅広い世代の方と知り合いになり、毎日、新しい情報を教えていただくことで視野が広がりました。出かける機会はこれまでよりずっと減りましたが、友人と話す時間は多くなりました。



挿絵：東京タワー

第 6 回総会延期について

コロナへの対応が 1 年半を超えました。ワクチン接種も始まったばかりで鎮静化には程遠いものを感じています。私たちの赴任国マレーシアでは、現在大きな感染の波に逢っています。6 月 2 日には、感染者数が 7703 人、死者数が 126 人というこれまでにない拡大を示し、ロックダウンに入りました。6 月 1 日からのマレーシアからの入国も、日本で 6 日間の施設待機措置がとられています。

本会の活動も定例会はじめ当初企画していた昨年開催予定であった、東北地域集会も延期となりました。また、今年 9 月には第 6 回のマレーシア会総会の開催が予定されています。

しかし、新型コロナの収束が見えてこない現況を鑑み、残念ながら延期させていただきたく、会員各位のご理解宜しく願います。来年には先が見えてき、開催が可能になることを祈念するばかりです。

なお、活動報告・会計報告等については次回の総会開催時にまとめて報告させていただきますことをご了承ください。

【KL 事務所を今年退職されたロシーダさんから OB・OG へのメッセージ】

Salam sejahtera kepada semua sukarelawan JOCV yang mengenali saya dari tahun 1983 hingga 2020.

Pada 31 March 2021 ialah hari terakhir saya dengan JICA. Saya mula berkerja dengan JICA pada 1 sept 1983. Semasa itu umur saya 22 tahun. Sekarang sudah 60 tahun.(sudah tua). Semasa itu saya sudah berkahwin dan mempunyai seorang anak perempuan. Pada tahun 1986 saya melahirkan lagi seorang anak lelaki. Semasa itu pejabat JICA di Jalan Yap Kwan Seng. Dan JOCV House di Jalan Aman.



退職日のロシーダさん



ヌルルさんとロシーダさん

JOVC yang sama batch dengan saya ialah Akira MAEJIMA-san. Kami masih berhubung sehingga sekarang.dan juga masih ada contact dengan ahli2 JOCV yang lain. Saya sangat seronok dapat berkerjasama dengan sukarelawan JOCV semua. Anda semua baik hati, rajin, dan cepat belajar bahasa melayu dengan baik nya. Dan juga semasa program Homestay. anda semua pandai menyesuaikan diri dengan keluarga angkat. Saya berharap apabila saya ada kesempatan pergi ke Jepun dapat berjumpa dengan anda semua nanti. Dan jangan lupa pada saya dan kita masih boleh berjumpa di FACEBOOK dan INSTAGRAM. Saya akan sentiasa mengingati pada semua sukarelawan JOCV dari dulu hingga sekarang. Saya berharap hubungan ini akan kekal hingga akhir hayat dan hingga ke anak cucu. Saya akan merindui anda semua. Take care.

Akhir kata dari saya.

KALAU ADA SUMUR DI LADANG. BOLEH SAYA MENUMPANG MANDI. KALAU ADA UMUR YANG PANJANG, BOLEH KITA BERJUMPA LAGI.

(最終ページに簡約を掲載しています。参照ください)

SAYONARA.

Salam sayang dari saya.

ROSHIDA

JICA MALAYSIA OFFICE



懐かしい隊員たちと
ロシーダさん
思い出の写真



前ページのロシーダさんのメッセージ簡約

1983年から2020年までに私が関わらせていただいたJOCV ボランティアの皆様へごあいさつ申し上げます。

去る2021年3月31日は私のJICAでの業務最終日でした。思い返せば1983年9月にJICAでの仕事を始めた時はまだ22歳でしたが、すでに60歳(もう歳です)。仕事を始めた頃、既に結婚して、女兒が一人いました。そして1986年には男児も授かりました。

その頃JICA事務所はジャランヤップクワンセンにあり、ジャランダマイには寮がありましたね。私は前島明さんの隊次の同期という事になります。私たちはいまだによく連絡を取り合っています。そしてその他のOVの皆さまともまだ連絡を取り合っています。ボランティアの皆様と過ごす仕事を得ることができてとても楽しかったです！皆様はとても親切でまじめでしかもマレー語をととても早く習得されました。そしてホームステイプログラムではとてもうまく滞在先家族に順応されました

もし日本を訪れる機会があれば皆様とお会いしたいと思っています。けれどフェイスブックやインスタグラムでもお会いできることをお忘れなく！

私はJOCVボランティアの皆様のことを忘れません。私はこのつながりが私たちの孫子の代まで受け継がれていくことを望んでいます。私はこれからもあなたたちを懐かしく思い出すことでしょう！ ご自愛ください！

最後に私から贈る言葉

もしあなたたちがこの地に来られたら、

どうぞお立ち寄りください

もし長生きをすればいつかまた

私たちまた会うことができるでしょう

さようなら 心をこめて

JICA マレーシア事務所ロシーダ

(簡約杉山クルミ s 58 年度 2 次隊)

事務局からお願い：住所、メールアドレスを変更された時は右連絡先までお知らせください。

協力隊まつり 2021

当会は参加しませんでした。今年は4月24日、25日にオンラインで開催されました。対面はできないものの、遠くのOB会の方が参加できるメリットもあり、WEB上とは言え、懐かしい顔にも会えました。オンライン協力隊まつり公式ホームページは下記とおりです。

<https://www.jocv-fes.net>

寄付のお礼・・ありがとうございました！

小倉重雄氏 (K.L.日本大使館元一等書記官 (協力隊担当))、大西益吉郎氏 (S.49 - 2) より計22,000円の寄付をいただきました。いつもありがとうございます。活動費として、大切にに使わせていただきます。なお、寄付は随時受け付けております。よろしくお願いいたします。

振り込み先：

郵便局記号：10140 番号 51611341

(郵便局外から振り込みの場合：店番 018、

普通口座 5161134 です)

口座名義人：青年海外協力隊マレーシア会

代表 白山 肇

マレーシア会は国際協力サロン内に事務局を置きます。なお、この会報は青年海外協力隊マレーシア会会員と2010年の青年海外協力隊OB/OG会出席者にEメールもしくは郵送の形でお送りしています。配信を希望されない方はご連絡ください。また、会員は現在620余名となりました。まだ、会員登録されていない方には、是非マレーシア会のことお知らせください。

発行 青年海外協力隊マレーシア会

会長 白山肇

162-8433

東京都新宿区市ヶ谷本村町 10-5

JICA 地球ひろば メールボックス 51

TEL：090-7186-1065 (国際協力サロン)

MAIL：malaysia@ics-together.com

https://ics-together.com/office_jocvmalaysia.html

(2021.6.30 発行)